



発行 KOA 森林塾 (事務局) 0265-70-7065  
 編集 早川清志  
 題字 島崎洋路

通年コース第四・五回開催報告

「測量・製図、測樹・施業診断」

# 『静かなるエネルギー争奪戦』

食べものやその煮炊きに、

そして暖房にと、人類はエネルギーを手に入れることに多くの努力をしてみました。当初は自然由来のものでしたが、産業革命前からは石炭や石油、天然ガスなどの化石燃料が登場し、エネルギー消費を大きく増やしてきました

た。

自前の資源が少ない日本は、エネルギー消費の96%にあたる24兆円を輸入に頼っています(2012年速報値)。もしこれらのエネルギー資源が何らかの事情で輸入できなくなったら、日本の経済は立ち行かなくなってしまうでしょう。福島第一



ブルーム・ライス測高器での樹高測定



こちらは輪尺と直径巻尺の競演

原発の事故以降は、エネルギー政策が、より一層国の将来を左右する争点となってきました。また、最近になって確立された、シエール層からの天然ガス採掘技術によって、世界のエネルギー争奪戦は新たな展開を見せています。

さて、山笑う新緑の季節も足早に過ぎ、山は濃い緑一色です。木々は人間の行っているような、エネルギーの争奪とは全く関係ない暮らししているように見えます。果たしてそうなのでしょうか。樹木は自力では全く動けません。そして物を動かすこ

ともほとんどできません。ですので、今いる場所で、そこにある資源だけに頼って生きていくのです。場所の争奪、水の争奪、そしてエネルギーである太陽光の争奪戦を繰り広げながら生きています。

生きるために、梢は常に上を目指し、幹や根は横や下を目指して伸び続けなければなりません。樹木には、一般的には寿命が無いといわれていますが、この戦いに負けることは枯死を意味します。そして勝者となる確率はほんのごく僅かです。こういった静かなる資源の争奪戦を繰り返して、森林は遷移を繰り返していくことになります。

森林調査の二日間でした。特に二日目の測樹から施業診断に至る過程は、どのよう

という前提となりますので、もう一度ご自宅で復習をして、確実に自分のものとしていただければと思います。

通年コース第4・5回  
 5月31日  
 (金) 測量・製図  
 6月1日  
 (土) 測樹・施業診断

参加者/井澤さん、金見さん、須永さん、滝川さん、中川さん、中村さん、原さん、守屋さん  
 講師、スタッフ/島崎先生、早川、古畑、松岡



最初はレベル合わせに一苦労



初夏の明るい陽差しの中で

## 6月2日(日) 木工(オプション)

9名の方が参加してヒノキ、アカマツなどの間伐材を使った椅子作りを行いました。中村講師(こうあ木工舎)のご指導でした。

専門コース第一回開催報告

『基礎を確実に身につける』

集中コースにご参加の経験を持った二方と、KOA森林塾は始めての3人、計5人の方が参加してくださいました。いずれの方もチェーンソーの経験は多寡の違いこそあれお持ちで、危なげない実践となりました。しかし、受け口の方向確認が曖昧であったり、あるいは自己流で行っていると思われる伐倒方法も見受けられました。もう一度初心に戻って、基礎を確実に身につけるための実践が必要だと思えます。

専門コース第1回開催

5月24・25日(金・土)

参加者/池上さん、小原さん、白川さん、水津さん、松本さん

講師・スタッフ/平林 早川、松岡

次回以降の予定

通年コース第6・7回

7月13・14日(土・日)

間伐

島崎先生を講師



いかがは嫌ご機嫌のマイチェーンソー

に、間伐の実践でも教えていただきます。

専門コース第2回

開催7月26・27日

(金・土)

少し傾斜のある山林での伐倒練習と、メンテナンス

スをしつかり行います。

集中コース

8月2〜4日(金・日)

少し腰が引けるかな

森の調査から分析

林塾のエキスを集めた三日間です。定員にまだまだ余裕があります。ご参加を検討中の方、ぜひおいでくださるようお願い致します。

白川 達夫 記

以前から何かで見かけて興味がありました。何かと忙しくて、カレンダーに書き込まれたスケジュールをこなすのが精一杯のその日暮らしです。ところが今年の森林塾生募集の新聞記事を見、なぜか自然と電話、受話器の向こうから聞こえる松岡さんの声。恐る恐るまだ枠は空いていますかの問いかけに、募集を始めたばかりなので大丈夫です、案内を送りますから住所氏名をとなり、3コース選択に困りましたが大胆にも専門コースにいきなり応募していました。

の方向にハンドルが向いていました。(途中で地図を見直してハンドル修正するも、又又すぐ目的地の近くでオーバーラン。集合時間間近、困り果てて松岡さんに電話をすると、大丈夫ですよ、最初は雑談などしてますからと対応して頂き、道案内から中曽根の信号、カーブミラーを右折、此処を通過していた私でした、見事に遅刻。門の前に女性が、その女性が松岡さんでした。最初からお世話になりましたが、温かい雰囲気全体にあふれている感じで、ホッとしながら皆さんの待つホールへと辿り着きました。先が思いやられますが、私なりに頑張りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

教室での往復ビンタは一人の人には手を上げず、悪いことをしたら仲間の責任として涙を流しながら、皆で叩かれましたが子供なりに納得していましたが、友達との連帯関係を形成してくれたと思っています。その拳の果てにスキーで骨を折り、松葉杖で授業、とにかく熱血三人組の先生方のおかげで、宮田高原キャンプ場には何回も足を運びました、帰り道は暗くなる頃の山道を転がるようにして駆け降りたものでした。

そして中学1年の真冬のこと。同級生と後輩の3人で、スキーを担いで宮田高原へ。胸くらいまである雪をかき分け小屋にたどり着いたのがお昼過ぎ。小屋に入り火を焚いて暖を取り、握り飯を食べて、雪が降る中で兄が作ってくれたスキーでスキーの真似事、後輩のお坊ちゃまのカメラで記念撮影、さあ帰りを急がないといけないと行動を開始。その当時自衛隊の訓練で林道を作っていた宮田高原の近くまで出来ていたの、そこまでたどり着き、あとは谷に落ちないように気を付けながら、6本の跡を残しながら帰宅。今の時代にこんなことしたら、大問題になるかなとも思いますが、楽しかった思い出です。



西駒ヶ岳のふもとに生まれた貧乏百姓の三男坊主。折しも戦時中、へその緒が取れる前に終戦、食べるお米と野菜や野にある天然のおやつで、すくすくと育ちました。小学校に入学、3年の時から新任の先生に変わりましたが、その先生山が好き、酒も好き、冬の授業はスケートとそり遊び、山裾の林道まで毎日のように通いました。ある日そりが立ち木に激突しかけたとき、先生が飛びついて止めてくれました。生徒を思う気持ち、今でも鮮明に覚えています。

タービンのブレード(羽根)や、見上げるようなコンプレッサーを作る会社でした。

そして独身寮20畳の畳の部屋に、二段ベットで12人。その昔は女工哀史で見るように、多くの女工さんが泣いたかもしれない、そんな部屋での共同生活をしながら、昼間は職業訓練で旋盤作業にフライス盤作業とやすり掛け作業と、3か月間専任の職長さんから厳しい訓練が続く、終業と同時に寮に飛び帰り、学ランに着替えて高下駄を履いて、煙を吐く汽車で岡谷工業の機械科に通学しました。

岡谷の駅に着くと停車するのが待てずに、改札口の前でデッキから飛び降りて、自転車で学校まで汗をかいて到着すると授業の開始。此処で生徒(同級生)は最高齢は42歳と幅が広く、会社では役職

もついているが兎に角勉強したいというような仲間があふれていました。

授業もユニークで、君たちは現場で働いている、君達のほうが詳しくことがたくさんあるだろうし、設備が学校よりも最新の機械が多く導入されていたことから、今日の授業はお前達が先生をやれ、おれも教えてもらうからな、そんな雰囲気でもうな気を出させてくれた四年間でした。

そうそうオリンピックの最中で、中継放送があり、教室

の入り口にバリケードを張り、授業のポイコットもやりました。いろいろやりながら現場で働き学ぶ毎日、実践で役に立つ事を多く学べた気がします。

そんな会社に12年間御世話になりましたが、チョットしたぎっかけて地元の人に転職することになりました。失業保険でも貰って少しは息抜きをしたい気持ちとは裏腹に、仕事と労働

組合の引継ぎ等で3月31日まで。新しく入る会社の総務課長が、4月の始めから来ないなら採用しないといわれて、日曜日(一日休んだだけで再就職。以来今日までいろいろ書き尽くせないほどの出来事に困まれて、そして多くの友達の輪などで精一杯生活しています。

皆さん聞いてください。宮田村にはワインのことを勉強する公民館の講座があるんです。一年目は基礎講座でワインのテイストイン

グをしながらワインの勉強をします。手作りのおつまみ持参で。その後は町の活性化をテーマに二次会へ。2年目はステップアップ講座、毎回2〜3種類のワインが味わえるんです。講師は本坊酒造のワインアドバイザーの方が務めてくれます。会費は毎回1000円で1か月に1回、たまにお

いしいワインの時は割増、卒業試験もあります。留年はありませんが、何回受けてもいいそうです。卒業すると宮田村ワイン大使に任命されてワインの普及活動に努めます。和飲会と称して2か月に1回の割合でひたすら飲みと食の会員となります。どなたでも参加できるんです。村外の方も多くいますよ。

KOA森林塾に参加した初日に、いきなり早川先生に原稿を依頼され、どんなことを書けばいいのか悩みましたが、作文は苦手な分野。思いついたままにキーを叩かせていただきました。

そして私の勝手な結論は、人生、いやいや全てのことに通じることは、『初心、事始めが大切、安心、安全は基本から』で、次回の実習が今から楽しみです、これからよろしくお願いいたします。

「持続可能」という言葉がここ数年目につくので、この言葉についてよく考える。資源の底が見え始めてから環境問題に絡んでよく使われているが、ネットで「持続可能」と検索してみれば「持続可能」のあとには色々な言葉がつく。「持続可能」な「農業」「まちづくり」「森林経営」などなど。「持続可能」とつ

リレー通信

持続可能な〇〇

滝川 麻衣

格好よさに惹かれた訳でもないが、私も数年前から自分に問いかける。「私の生活は持続可能か?」

私が持続可能という言葉を実際に意識するようになったのは、タンザニアにいったときだった。青年海外協力隊として赴任していたのだが、来たからにはこの国のために何かしらのプロジェクトをやらねばと考えていた。しかし現地では今の日本ですら簡単に手に入る物も手に入らない。お金もない。電気もない。身近に手に入るもので、お金がかからず、維持管理が簡単でないと続かない。そうすると一番初めに目に入るのが、すぐそこにある自然である。もともと現地の人はうまく自然を利用して

いる。燃料は薪か炭だし、水は井戸や川から得て、畑を耕して自給自足している。木々に初めに興味を持ったのも、タンザニアにいたときである。



例えばモリンガという木の種には水の浄化作用があるとか、ある木の根元を掘れば水があるとか、木々には

の効果があつたのだと知ったからである。そこで少しでも持続可能性を高めるために、私はそういった資源をもう少しうまく使えないだろうか、という風に考える。

ただ当時の私なんて本当に無知な小娘だったので、現地の人に教えてもらえばいい、自分が教えらるることなんて何一つなかったのだが。現地では満足に食べられない人が多いので、とにかく食べることを大事だと私は感じていた。しかし日本では買えばかりで農業のやり方さえ全く知らなかった。肥料が買えないから作物が育たないというから、「じゃあお金のかわらない農業を学ぼう」と単純に思った。そこで日本に帰ってから借金してまでプロ有機農家養成スクールに通ったが、そこでの農業のやり方に違和感を抱いて途中で

やめた。自分はお金のための大規模農業には向かないことが分かったし、外面ばかりいいスクール自体に幻滅していたからだ。森林のことを本格的に学ぼうと思ったのもその頃だった。スクールに通っているときに森林インストラクターの勉強を始めたら、「畑だけやっていてもだめだ、山もどうにかせねば!!」と奮い立ち、森林塾に通うことを決意したのである。

農業を勉強する前、タンザニアから帰ってから間もなく、ある日本のNGOのスタッフとしてザンビアという国に一年間行っていた。タンザニアにいるときは基本



的に現地の人に溶け込んで活動していたので、何を見ても現地人の目線からだった。首都で悠々と暮らす外国人に何が分かるんだって、生意気に思っていた。しかし今度は、事業を運営し、彼らに指示をする立場だった。私がタンザニアにいるときに、目の敵にしていた存在である。小さな組織なので贅沢はしないが、移動は車で、首都暮らしで電気も水道もある。普段の買い物は外国資本で外国製品だらけのスーパー。日本人同士の付き合いも大事だし、新しく出来たおしゃりなバーにたまに美味しいお酒とごはんも食べにいく。はじめはそんな暮らしに罪悪感一杯で、このまま馴染めないんじゃないかと思っただが、いつしか慣れたふりをしやり過ぎすようになった。

さて、援助側の組織では実施する事業の持続可能性を考えて計画を立て、現地の人にその重要性を訴えるわけだが、自分の組織の持続可能性については真剣に考えている団体はどれだけあるのだろうか？事業はふつつ実施期間が決まっているの、期間が終われば資金は途絶える。「事業が終わるとお金がもらえなくなるから、自分たちの給料を出

すために新しい事業が必要だ」そんな理由で新規事業がつくられる場合もある。こうなると、現地の人々のためになく、組織が生き残るための事業である。アフリカの一般民は、大変苦労はしているが、今の我々よりずっと持続可能な生活をしている。その彼らの生活の中にお金を持ち込んで貧富の差を広げ、資源を浪費し、自然を壊しているのは援助だ開発だと言って乗り込んでいる外国人だ。ひねくれ者の私がアフリカ人の立場なら、外国から来た援助団体にこう聞くだろう。「いつも持続可能性を議論しているけど、あなた方の今の生活は持続可能な？」自分自身の生活に持続可能性が見えない限り、アフリカには戻れないと思った。

私は今年5月から岐阜県の東白川村という場所で、山と川と田畑に囲まれた畑付きの古い一軒家で暮らしている。昔は物と人と情報が集まる都会に住みかを探していた。でも今は、森林塾に通い、田畑のことを学び、仕事はほとんどに、いかにお金に頼らず生活できるかを模索している。生きるための技術は、お金を使わないほうが学べると知ったからだ。自分自身の生活に持続可能性が少しは見えてきたような気がする今日この頃である。

コラム

### "日本林業の行方"



#### その②そして林学へ

長野農専への出願書をしたため、M君と中学の担任だったO先生を訪ねた。願書の志望学科には、M君は親父さんが当時御料林(皇室財産)の吏員であったことや、林学の教官に知り合いの先生がいらつしやるとかで『林科』としていたが、私は林学の知識は全くなかったし、厳しい食糧難のさなかでもあったので、もしも合格できたらお百姓さんにもなるかと『農科』を選んだ。ところが先生曰く、今回の受験生には現役やOBのほかに沢山の復員軍人も加わり競争率は異常に高いよ。少しは競争率の低い林科にしたら」と。何の準備もしていなかった私はふたつ返事で『農』を『林』に書き換えてもらった。入試の結果は同期生34人中6人合格(農3、林3)の一人となった。M君は残念ながら合格せず、以後別な途に進まれた。

長野農専は敗戦直前の昭和20年(1945年)4月に開学したばかりで、私らは2期生であった。全くの仮校舎で始まった事業は教科書もなく、何事も初めてのことばかりであったが、何の抑圧も感じられない雰囲気の中で、兄貴みたいな若手教官を中心に、一緒になってカリキュラムを組み立てた当時がありありと思ひ出される。手薄な教官方ではあったが、旧制東大や京大出の年配先生方も敗戦に伴う戦後処理や新体制への切り替え業務などに追われながらも、授業や実習はほとんど欠くことなく懸命に教授いただいた。



予期していなかった林学の授業は、飢えていた知的欲求を充たすにはこの上ない授かりものであった。後年、よもや大学の林学科の教官を務めようなどとは全く思いつきもなかったが、あの3年間の学習のひとこまひとこまは、その後の大学教育や巷間での研修会などに際して、かけがえのない知的財産となつて今日に及んでいる。

その間「林学は広く浅い学習をしれば耳にしたが、浅学の身には真意を解することもおたわず、旧制農学校(後の農業高校)の教科書が貴重な参考図書として役立てられた。

3年の後期に入ると、卒業後の進路が話題になり始めた。戦禍による若手男性の人手不足も手伝って、林学の分野でも公務員や教員(高校の理科・農業、

中学の理科の資格は卒業資格に含まれていた)をはじめ民間大手の関連企業からの求人も多く、クラスメート(40名)のほとんどが卒業時までにはほぼ希望どおりの内定を得ていた。

T先生の経理学にのめりこんでいた私は、昭和24年度(1949年)から始まる森林計画の要員を募っていた長野県森林組合連合会(県森連)の施業計画課に3人の同僚と迷わず就職を決めた。

島崎 洋路

**おわりに**

5月間末に、例年になく早く梅雨入りした長野県内ですが、伊那界限は、はその後もとまぬ雨がなく、畑もカラカラの状態でした。ここに来てようやく本物の梅雨模様。畑の野菜実もんでいます。

森林塾も7月からいよいよ間伐などの佳境に入ります。できれば開催時にはきつぱり晴れて欲しいですね。その頃には、もう梅雨は明け始まっているでしょうか。

投稿大歓迎。ご意見やご質問は、事務局まで。

TEL 0265-70-7065  
FAX 0265-70-7994  
E-mail: mi-matsuoka@koanet.co.jp  
ki-hayakawa@koanet.co.jp  
携帯:090-4463-0062(開催日)  
URL http://www.koanet.co.jp

